

インタビュー

春日井市出身 歌人

すず かけ しん
鈴掛 真さん

東京都在住。
ワタナベエンターテインメント所属。
広告会社でコピーライターを3年間経験後、
作家業に専念。
著書に、歌集『愛を歌え』（青土社）、
エッセイ集『ゲイだけど質問ある？』（講談社）がある。



— 鈴掛さんは、ゲイであることをオープンにしていっていらっしゃいますね。初めてカミングアウトしたのはいつだったのでしょうか？

中学生の時に、同級生の女の子2人にしたのが最初でした。何でも話せる仲の良い友達でしたが、セクシュアリティだけは最後の秘密のようになってしまい、100%友達になれていない、越えられない壁を感じていました。「その友達とだったら越えてみたい」と思ったことがきっかけです。

カミングアウトする前は、セクシュアリティを秘密にすることが当たり前でしたが、誰かに強要されているわけでもないのに、社会に合わせて自ら秘密にしているのだと気付きました。誰に対しても壁を作らない生き方を選んでみたいと、少しずつ思うようになりました。

— 壁を作らない生き方を選んだことで、周りの方との関係はどんなことが変わりましたか？

社会人になって高校の同級生にカミングアウトしたら、「そんなこと早く言ってくれば良かったのに」と言ってもらえて、とても嬉しかったです。周りの人からしたら、セクシュアリティはさほど大きな問題ではないかとも思えるようになりました。

— ご家族にはどのタイミングでカミングアウトなさったのですか？

母親には、思春期の頃に勢い余って話してしまっただけがありました。その後は親元を離れて、セクシュアリティをオープンにして執筆したエッセイを両親にそれぞれ1冊ずつ送りました。父にはエッセイを送ることでカミングアウトしたわけですが、父から「すごく良い本だと思うから自信を持って、これからも頑張る」と書かれたハガキが送られてきました。今では両親ともに応援してくれています。

— ご友人にもご家族にも比較的スムーズに理解してもらえたんですね。その後、人との関わりの中で「これはわかってほしい！」というギャップのようなものはありますか？

以前「自分はゲイだから、女性の気持ちも一般の男性より分かっている」と思って、女性向けのメディアの編集に携わったことがありました。でも、編集長から「ゲイだからもっとフェミニンなのかと思っていただけ、中身は完全に男だね」と言われてハッとしました。「ゲイ=女っぽい」「ゲイ=男の気持ちも女の気持ちもわかる」といった社会の偏見を当たり前のものとして自分も認識してしまっ